

# 広瀬満正略伝

殖産興業を主とし国利の増進を念とすべし

文 久葉裕可

## はじめに

広瀬満正は、愛媛県を代表する実業家であり、貴族院議員でもありました。戦前、東予地域の重要産業となった製茶業の基礎を作り、県内の近代産業の育成にも大きく貢献した人物です。しかし、彼の業績は、父・宰平や養子・次郎に比べてあまり知られていません。その理由は、宰平の業績が大きく、その陰に隠れてしまったこと、三十歳以降、活動舞台を京阪神に置き、地元新居浜の事業の管理を、娘婿の次郎に任せられたこと、多くの事業に関わりながらも病気がちであったため、そのどれをも成し遂げることができなかったためと思われる。

## 生い立ち

広瀬満正は、安政六年（一八五九）十二月



廣瀬宰平

文政 11 年～大正 3 年(1828～1914)  
滋賀県生まれの実業家。11 歳で別子銅山に勤務。別子銅山支配人を経て、住友家初代総理人となる。別子銅山を近代化し、日本の近代産業を近代化し育成した。

二十八日、父宰平・母町の長男として、伊予国新居郡金子村久保田（現、新居浜市久保田町一丁目）の広瀬本邸で誕生しました。幼名を亀太郎といい、のち赤水を号とします。父宰平は、この年三十二歳、別子銅山で勘場大払方兼貸方役頭を務めていました。安政元年、宰平は大坂の今西徳右衛門の娘相と結婚し、翌年広瀬義右衛門義泰（住友予州別家）の夫婦養子となりましたが、その年の末、相は難産で子供とともに死亡しました。安政六年、大坂八尾三右衛門の娘町と再婚して満正が



若き日の廣瀬満正(中央)  
明治 5 年 5 月、大阪で撮影されたもの。  
当時 14 歳の宰平と友達たちが写っている。  
写真の箱書きには「同盟五人之形」とある。

誕生しました。しかし、その町も文久二年（一八六二）八月五日、二十三歳で亡くなります。一人っ子で当時四歳だった満正は、仕事で忙しい宰平に代わって、祖父母（広瀬義泰、為）によって育てられました。祖母は、満正が成人した後の明治十九年（一八八六）九月まで生きていましたが（享年八十四）、祖父義泰は、慶応三年（一八六七）二月、満正が九歳の時に亡くなりました（享年七十）。  
慶応三年、満正は、宰平と親しかった儒者遠藤石山の私塾稽宗館（現、新居浜市泉川）



中江 兆民(『中江兆民』より)  
 弘化4年～明示34年(1847～1901)  
 土佐藩出身の政治家・思想家。フランス留学  
 後、仏学塾を開き、フランス語・政治思想を  
 教授。『民約訳解』を翻訳し「東洋のルソー」  
 と言われた。

に入学して、漢学を学び始めます。

満正と石山との交流は、こののち石山が亡くなるまで続きました。明治二年、十一歳で大阪に、そして翌明治三年(五年とも)に東京へ出て、林欽次のフランス語塾(迎義塾)と横浜在住のフランス人モノーの下でフランス語を学びました。明治七年、京都に移り文部省直轄仏語学校で、フランス人御雇教師レオン・ジュリーに学び、その後再び上京して東京外国語学校現、東京外国語大学と、中江兆民の仏学塾で学びました。

### 上原の開発

明治十一年(一七七八)、満正は病気のため新居浜に帰郷します。治った後、父宰平に



製茶工場 (大正時代)

明治10年、上原に馨原製茶所と称して建てた工場。建坪1300平方メートル。商標が見える。

従って大阪に行きませんが、病後の身に合わず、再び帰郷しました。その後は、宰平が進めていた上原(現、新居浜市上原)周辺の開墾事業を引き継ぎ、農林業に従事しました。上原の開拓は、明治七年、宰平が住友家より三四町の土地を譲り受けたことに始まります。宰平は、この地を茶畑として開墾するため、上原出張所を設けて開墾を進めます。明治十五年には、滋賀県滋賀郡と京都府宇治郡の茶師五人を雇い入れ、本格的技術導入を図っています。こうしてこの年には、植え付け反別の累計が、五十三町五反余り(約五十三ヘクタール)になり、上原の面積と同じ程の広さとなっています。

こうした中、満正は茶樹栽培と製茶の改良に務めます。自ら宇治で実地練習を行い、十



廣瀬 米  
 慶応2年～明示32年(1866～1899)  
 滋賀県近江八幡で伊庭貞隆・田鶴の長女として誕生。兄は伊庭貞剛である。  
 明示14年満正と結婚し、5女を生む。  
 命じ2年、34歳の若さで死亡した。

二町の荒れ地を開拓して茶畑にしたり、茶園の修理や茶摘みに付近の住民を雇って、彼らの農業以外の副収入の機会を増やしたといえます。また色々な柑橘類を栽培して、それがこの地に適しているかどうかを調査したので、この地方における果樹栽培の模範とされました。さらに植林や造林も進んでこれを行い、官林・共有林の保護に努めています。こうした実績から、明治二十年に創設された愛媛県茶業組合では、新居・周桑郡の組合長となりました。

この間満正は、明治十四年に滋賀県近江八幡西宿(現、近江八幡市西宿)から、宰平の実の姉田鶴の娘で、伊庭貞剛(のち住友家二代総理事)の妹・米と結婚しています。また、明治十六年には、角野村御蔵(現、新居浜市

御蔵町)に自費で「馨原校」という学校を設立しました。教師を雇い、本や学用品を支給して、中萩村上原、角野村御蔵・三ツ石(現新居浜市上原二丁目、御蔵町、中村四丁目)など、付近の児童を集めて教育を行いました。当時の初等教育は、必要な費用を保護者が負担しなければならぬなど、不十分でした。このため地方では、学校に行ける子供が少なかったため、それを補うために馨原校を作ったと思われます。しかし、明治十九年から義務教育が実施されることになったので、明治十八年で馨原校は廃校となりました。

上原周辺の事業が本格化してくると、本邸が久保田のままでは不便を感じるが多くなりました。このため明治十八年、宰平の指示によって、上原への本邸移転に取りかか



指月庵 (撮影 小野吉彦)

明治21年完成の茶室。当初満正は「梅月庵」と名付けるつもりであったが、遠藤石山により「指月庵」と命名された。満正は、完成の喜びを「指さして教える梅や、月の案」と詠んでいる。



『蜻尾の遊び』

明治23年東北、北海道を旅行したときの感慨をまとめた俳句集。赤水の号を用いている。

ります。明治二十年には移転をほぼ終え、明治二十二年四月には、新築の新座敷も完成しています。工事期間中、満正は宰平の代理として、現地の指揮を取っています。満正は、明治十九年六月に、宰平から広瀬家の家督を譲られましたので、新座敷の棟札には、「家長 広瀬満正」と書かれています。

また、このころの満正は、俳句と狩猟を好んだようです。俳号を指月庵拾柴といいます。指月庵は、遠藤石山が命名した上原本邸の茶室「指月庵」にちなんだものです。明治二十三年七月には、親戚で住友に勤める久保盛明と一緒に、東北・北海道を遊覧して、その感慨を俳句集『蜻尾の遊び』にまとめています。

(明治二十六年八月発行)。また狩猟は、上原の整備を進めていた時代に、特に好んで行っていたようで、健康への影響を心配した宰平が、度を越さないよう注意をしたこともありました。

### 関西実業界への進出

満正は、地元上原の整備を進める一方で、明治二十年(一八八七)に神戸市諏訪山に別邸を建て、京阪神での活動を始めます。最初は、製茶の輸出が目的だったようです。さらに明治二十二年六月一日からは住友神戸支店に勤務して、樟腦の精製輸出や製茶の再製輸出、そのほか、銅、アンチモニーなどの商品売買の仕事をしています。明治二十七年二月二十二日に、神戸支店貸付課々長となりますが、三月二十四日に退職しました。

住友退職後の満正は、明治三十年頃までの間に、京阪神及び愛媛県内を中心に、さまざまな事業の設立や運営に携わるようになります。主なものに、次のようなものがあります。  
・明治二十六年から二十八年にかけて淡路紡績株式会社を設立して、専務取締役社長に就任。

・明治二十七年、渋沢栄一、藤田伝三郎らが設立した大阪紡績株式会社（現、東洋紡績）の監査役に就任（のち取締役）。

・明治二十七年七月、貿易機関の必要性を感じ、日本貿易銀行を設立して、明治二十八年十月十五日、神戸市に開業。頭取専務取締役就任。二十九年六月には、福岡県門司港に支店を設置。

・明治二十八年九月、貿易倉庫の不備を感じ、日本貿易倉庫会社を設立して、専務取締役社長に就任。翌二十九年六月開業。神戸市及び福岡県門司に倉庫を建設。

・明治二十八年九月、杉本勘七ら七人と発起人になり、住友末家と職員有志の共同出資によって、株式会社泉屋銀行を設立し、翌月大阪市に開業。取締役に就任。（明治三十二年六月解散）

・明治二十八年十一月、野呂邦之助らとともに直輸入品取り扱い会社、内外物産貿易会社を設立し、取締役に就任。アメリカ・ニューヨークに支店を出す。

・明治二十九年一月、日本の樟脳精製技術の完成者、松田茂太郎らとともに日本樟脳株式会社（明治三十二年、専売局神戸出張所工場となる）を神戸市に設立し、常務相談取締役

に就任。同年七月に開業。欧州、米国、清国、インド、シンガポール、オーストラリアへ精製輸出を行う。

・明治二十九年、川崎正蔵が運営する川崎造船所（現、川崎重工業株式会社）を株式会社に改組するにあたり協力し、取締役となる。  
・明治三十年十月、農工銀行期成同盟会を組織し、翌年四月一日、愛媛農工銀行（のち日本勧業銀行松山支店）を設立して取締役となる。

この他に日本生糸貿易株式会社、日本製茶輸出株式会社、日本紙類貿易株式会社、株式会社八弘社（明治八年、広瀬宰平が設立した葬儀会社）、伊予鉄道株式会社、株式会社神戸倶楽部、江商合資会社現、兼松株式会社）



廣瀬 次郎  
明治6年～昭和27年(1873～1952)  
東京出身の実業家・教育者。河原徳立の次男。東京帝国大学卒業後、農商務省に入省。廣瀬家の婿養子となり、郷土の発展と養蚕の普及に努めた。

東洋土木株式会社、四国鉄道株式会社（明治二十八年発足、明治三十一年解散）、船越鉄道株式会社（明治二十八年創立、のち九州鉄道が買収）、台湾鉄道株式会社、東華紡績株式会社（明治二十九年上海に設立、翌年解散）、日本精糖株式会社（明治二十九年、渋沢栄一と関西資本家が大阪に設立）などの設立に関わって、取締役や監査役となっています。

また、地元新居浜では、明治二十九年ころより山根（現、新居浜市山根町）に末広組煉瓦製造所を設立し、煉瓦製造を始めています。そして明治三十年四月から十一月にかけては、商工業視察のため、自費で欧米巡遊を行い、同じ年、神戸商業会議所の特別議員となつています。

このころ家庭内では、明治三十二年九月二十八日、妻米が病気で亡くなっています（享年三十四）。翌年五月十六日には、農学士河原次郎を長女艶香の婿として迎え、上原本邸と事業を管理させました。一方満正本人は、明治三十五年四月から、京都二条河原町の高瀬川沿いの別邸（現、広誠院）に移り住んでいましたが、明治三十八年五月、病気となり、多くの事業から手を引きました。

健康の回復に五年かかったといわれています。



川原 徳立  
弘化元年～大正3年(1844～1914)幕府御家人出身の官僚・実業家。ウイーン万博の御用掛を経て、輸出用陶磁器の上絵付工場「瓢池園」を気づいた。のち、満正と京都瓢池園を設立。

ますが、明治三十九年、満正は、次郎の実父河原徳立と共同で、京都市三条蹴上(現、京都市山科区)に京都瓢池園製陶所を始めました。東京で陶磁器の上絵付け工場「瓢池園」を経営していた徳立が陶磁器の制作を監督し、満正が経営を行っていたようです。東京の瓢池園は、輸出用陶磁器の上絵付けとして有名でしたが、京都瓢池園は、国内向けの陶磁器制作が中心でした。新たな技法やデザインに挑戦して、高級品を目指した一品制作を行いながら、その一方で各地の土産物も作るなど、殖産興業的な側面ももっていました。これは、満正の方針によるものでしょう。明治四十二年、工場が七条大宮通西入(現、京都市下京区)に移転すると同時に、徳立が高齢を理由に引退し、全てが満正に任されるこ

とになりました。しかし大正三年(一九一四)、徳立が亡くなると、間もなくこの事業も終わってしまつたようです。京都瓢池園の作品は、八年余りの短い制作期間であつたため、幻の近代陶磁器といわれますが、その作品群は広瀬家京都別邸に引き継がれ、今も広誠院に伝えられています。

病気が治つた満正は、明治四十四年六月、愛媛県の多額納税者同士の選挙によって、貴族院議員となり、大正三年には勲四等に叙せられました。この頃の事業活動としては、京都瓢池園製陶所以外に、日本扇子、日本製布、仁寿生命、松山商業銀行(明治二十九年設立、合併を重ねて、現、広島銀行となる)、大東塗料、朝鮮殖産銀行(大正七年設立)、国際汽船(大正八年創立、のち大阪商船 現、商船三井 に合併)、江若鉄道(大正十年開業、現、JR湖西線)、京都取引所(明治十七年に設立された京都株式取引所が、京都米穀商品取引所を合併して改称)などの重役を務めています。また、大日本武徳会(京都府知事を会長として創立された武道団体。武道振興とその近代化につとめたが、戦後解散)、日仏協会等の団体役員も務めています。

個人的なことでは、大正三年一月に父宰平

が八十七歳で亡くなりました。また同じ年、恩師であり父子ともに親交の深かつた遠藤石山の遺稿集『石山遺稿』を自ら編集して発行しています。

## 晩年

大正十一年(一九二二)ころ、満正は再び体調を崩します。静養のため、新居浜に長く滞在していたようで、この頃整備が進められていた上原本邸 洋園(南庭)内の煉瓦書庫「警原文庫」や茶室「虚室」(現存しません)の建築について、満正が直接指示をしています。

大正十三年四月には、本邸内の持仏堂「靖献堂」の開堂式が行われました。満正はその式辞の中で、西洋文化が日本人に浸透しながらも、西洋の博愛奉公の精神は伝わらず、我が国古来の忠孝の美風も衰退してきた」と当時の世のありさまを嘆き、わが国の道徳の根本である祖先を大切にすることを伝えるため、靖献堂を建てたといっています。また同じ年の一月、満正は広瀬家の家憲家の決まり事を定めています。ここでも祖先を大切にまつること、父宰平の意志を継いで殖産興業を中心として、国の利益を考えて実行すること、

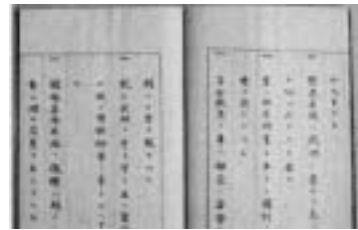


靖献堂と馨原文庫

廣瀬家の持仏堂である靖献堂(左)は大正 11 年に外観が完成、同 13 年に開堂式が行われた。写真右の煉瓦書庫(馨原文庫)は読書を奨励した満正が、地域の人たちの知識開発に建てたもので、大正 12 年に外観が完成。

こどもや女性の教育に力をいれること、飾らずまじめに生活し、儉約に努めるべきことなどを決めていきます。さらに二年後の大正十五年十二月には、父宰平の伝記『宰平遺蹟』を出版しましたが、その自序(前書き)によると、最近の世の中のあるさまや人の心の変化を嘆き、これから国を支えていく若い人たちの指針となるようにといい思いを込めて編さんしたものだといっています。これらの事業から、このころの満正の思いを知ることができます。

その後、満正の健康状態が回復することはなく、昭和三年(一九二八)十二月五日早朝、京都別邸で七十歳の生涯を終えました。法名



廣瀬家家憲(大正 13 年 1 月)

父宰平の意志を継いで殖産興業を主とし、国利の増進を図ることを家憲としている。

を広誠院寿嶽赤水居士といっています。従六位を贈られ、一族の眠る新居浜山田墓地と京都南禅寺に葬られました。また、満正が晩年をすごした京都別邸は、昭和九年三月、後妻のうた夫人によって、満正の遺徳を偲ぶための財団法人広誠会とされ、さらに昭和二十五年三月に、宗教法人保水山広誠院に改められて、今日に至っています。

この文章は、『新居浜市広瀬歴史記念館年報』五号に、「広瀬満正の履歴史料について」として掲載したうち、満正略伝の部分を読みやすく書き直したものです。

### 出典及び参考文献

・広瀬満正「明治廿九年十二月廿八日 広瀬

満正貿易事業関係履歴書」(広瀬歴史記念館所蔵)

・広瀬満正「明治四十四年八月 広瀬満正履歴書」(広誠院所蔵)

・広瀬次郎「(昭和四年)大岡氏宛書状案(広瀬満正履歴)」

・『広昭』温故知新号(広昭会、昭和五年)

・広瀬宰平自伝『半世物語』(明治二十八年、昭和五十七年住友修史室復刻)

・旧広瀬邸文化財調査委員会『別子銅山の近代化を見守った広瀬邸』(新居浜市、平成十四年)

・末岡照啓「幕末維新时期、新居浜上原の新田開発と広瀬宰平」(『住友史料館報』二七号)

・末岡照啓「広瀬宰平小伝」(平成十五年、新居浜市広瀬歴史記念館)

### 広瀬満正略伝

殖産興業を主とし国利の増進を念とすべし

平成 16 年 11 月 21 日発行

著者 久葉 裕可

編集 新居浜市広瀬歴史記念館

発行 〒792-0046

愛媛県新居浜市上原

2 丁目 10 番 42 号

TEL(0897)40-6333

FAX(0897)40-6334